2021 年度音楽学部・音楽研究科提出論文

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 京都市立芸術大学音楽学部 公開日: 2022-03-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://kcua.repo.nii.ac.jp/records/2000284

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.

2021 年度音楽学部・音楽研究科提出論文

〈修士論文〉

日本音楽研究専攻

韋　　又文　近代中国「新音楽」と「新日本音楽」の誕生と展開

—中国古箏・日本の箏に着目して—

Beginning and Recent Developments of Shin-Nihon-Ongaku (New Japanese Music) and Chinese Xīn-yīn-yuè (New Music): Focus on Chinese gǔ-zhēng and Japanese sô (Koto)

要旨：近代日中両国の伝統的音楽においては、ほぼ同時に革新活動が始まった。その二つの新しい音楽ジャンルは、西洋音楽の要素を貪欲に摂取し、それまでの音楽の伝統を刷新した。この論文の目的の一つは、中国「新音楽」の箏楽と「新日本音楽」の箏曲において、「前の時代から継承してきた伝統音楽を守る立場」と、「西洋音楽の技法や理論を取り入れ新しい音楽を発展させる立場」とがどのような関係にあったのかを明らかにすることである。本論のもう一つの目的は、中国「新音楽」・「新日本音楽」がその後の両国の伝統音楽に与えた影響と、こんにちにおける位置づけを明らかにすることである。

本論では、中国「新音楽」と「新日本音楽」誕生期の古箏 / 箏の伝承・創作活動の実態を概観し、そして、中国「新音楽」「新日本音楽」以後の伝承・創作活動・音楽教育 / 養成システムの変遷をも概観したうえで、「新音楽」「新日本音楽」それぞれの代表的作品の楽曲分析をおこなった。そして現在の古箏 / 箏演奏家および一般人を対象として中国「新音楽」「新日本音楽」に対する意識調査を行った。

「新日本音楽」の宮城道雄作曲「春の海」と、中国「新音楽」の茅沅作曲「瑶族舞曲」古箏独奏版を分析対象としてとりあげた。どちらも現在では、いかにも日本らしい曲、中国民族色濃い曲としてその名がしられているが、楽曲形式、演奏技法、声部構造などあらゆる要素において、西洋音楽・楽器の作曲技法・演奏技法を採り入れていることが明らかになった。また、意識調査では、現代人の大半が、きわめて西洋的要素の濃い「新日本音楽」「新音楽」を、「伝統音楽」と感じている実態が明らかになった。

現代においては、「新日本音楽」「新音楽」以前の伝統音楽よりも、「新日本音楽」「新音楽」以後の音楽、若者に受け入れられやすい。「新日本音楽」「新音楽」の出現は両国の伝統音楽の方向性を根本から変え、今の若者にとってその「新しい音楽」こそが伝統であり古典である。「新日本音楽」「新音楽」は、日中両国の伝統音楽の命脈を維持することに大きく貢献することとなったが、反面、「新日本音楽」「新音楽」の以前の音楽の衰退を招いたともいえる。

両国それぞれの新たな伝統音楽について横断的に考察した結果、同じ東アジアの、隣国同士において、伝統音楽と西洋音楽受容との折衷あるいは葛藤、という意味では明らかに共通した歴史を有している、といえよう。

孟　祥健　荻生徂徠の楽律の研究
—琴律を中心に—

Ogyu Sorai's Thought on Musical Mode: Focus on Music Mode of Guqin

要旨：荻生徂徠（本名は物部、修姓は物、字は茂卿、1666-1728）は、江戸時代の儒学者であり、中国古代の礼楽制度を日本で再現するため、礼楽の「楽」を中心に研究と実践を行った。徂徠は中国の「古三代」（夏、商、周の時代）において聖王が作った楽を探求するために、中国古代の楽律を研究し、独自の楽律論（音律と調にかんする論）を提示した。更に、琴の最古の楽譜である『碣石調幽蘭第五』の打譜を行っている。この実践は、徂徠の楽律研究を構成する重要な部分となっている。

以上は、先行研究によって周知のこととなっているが、まだ明らかにされていないことも多い。たとえば、徂徠の「歌奏異均」の説は既に多くの研究者によって論述されている、しかしそれは、単なる理論上の学説であるのか、あるいは実践の産物であるのか、未だに明快な結論はくだされてはいない。また、徂徠が『楽律考』にて考証した中国歴代変遷の黄鐘のピッチは、西洋音高に換算するとどうなるのかについても、未だに結論は得られていない。

徂徠の著作である『楽律考』、『楽制篇』、『琴学大意抄』には、中国古代の文献からの引用とともに、徂徠自身による楽律論・琴律論が書かれている。『楽律考』において、徂徠は「周漢の黄鐘（こうしょう）＝日本の黄鐘（おおしき）」という仮説を証明するため、中国歴代の黄鐘の変遷を論述し、「十の証」（10 の証拠）を述べている。『楽制篇』はおいては、中国の古楽の「五調」（清商五調）は日本に伝来し、日本雅楽の五調子となった、さらに、古楽の「五調」は中国で琴に受け継がれ、琴の五調として伝えられてきた、すなわち、「中国の「五調」＝日本雅楽の五調子＝琴五調」という結論に、徂徠は至ったのである。この結論は、『琴学大意抄』における、琴の「歌奏異均」にかんする徂徠の新たな仮説によっても、補強されることになる。

徂徠の説の特徴のひとつは、琴律を中心に自分の学説を構築している点にある。本稿では、三つの文献の具体的な内容を紹介・解読し、徂徠の楽律論・琴律論の独創性を明らかにしたい。

寳生　紗樹　都をどりの芸態研究
—明治大正期を中心に—
A Historical Study of *Miyako-Odori* Performance in the Meiji and Taisho Era

要旨：京都市東山区の祇園甲部歌舞練場では、毎年春に都をどりが上演されており、京都の春の風物詩として知られている。

都をどりは、明治 5 年第一回京都博覧会の附博覧としてはじまり、以来、今日まで上演が継続している。

本研究では、明治 5 年の初演から大正 15 年までの都をどりの歌詞を調査・翻刻し、明治・大正期の都をどりの歌詞を第一期から第八期に分類した。

結果、初演時は、文明開花に突き進む京都を巧みに歌詞とし、以降、明治期は風物を歌い、古典文学への接近を試み、新年御題を毎年の歌詞に取り込み、大正期になると、宮廷文化の主題化と民俗芸能への取材が行われたことがわかった。

作曲専攻

宮ノ原綾音　ドイツ・オーストリア表現主義における絵画と音楽の関連性
—クルシェネク作曲オペラ《オルフェオとエウリディーチェ》を中心に—

要旨：本研究では、画家のオスカー・ココシュカと多様な作曲様式を用いる作曲家エルンスト･クルシェネクの共同作品であるオペラ《オルフェオとエウリディーチェ》を取り扱い、表現主義における絵画と音楽の関連性について考察した。

器楽専攻

〈ピアノ〉

池田　　菫　フランツ・リストの編曲美学と編曲技法についての考察
—シューベルトの歌曲《冬の旅》のピアノ独奏用編曲を中心に—

要旨：リストによるピアノ独奏版《冬の旅》を、シューベルトによる原曲と比較し分析した。ピアノ一台に移し替える際に用いた曲集の構成や様々な技法の検証を行なうことで、リストの編曲技法を明らかにした。

楊　　开雯　王建中の活動と創作
—中国のピアノ文化の発展に与えた影響を中心に—

要旨：本論文において、中国のピアノ芸術の発展の歴史を概観したうえで、当時の政治的、経済的、文化的状況と関係づけながら王建中の創作史を整理した。そして、彼の代表的な作品から体系的に分析した。さらに、王のピアノ作品が中国のピア

ノ教育やピアノのための芸術音楽の創作にどのような影響を与えたかを明らかにした。

声楽専攻

西田みずほ　アンブロワーズ・トマの《ハムレット》における「乙女オフィーリア」の狂乱と死の表現
—花と水の象徴性を手掛かりに—

要旨：トマのオペラ《ハムレット》では、主人公ハムレットの恋人であるオフィーリアが、狂乱し、死に至る場面が描かれる。その描写について、作曲の背景にある文化や美学、観念を探り、トマの音楽による表現を分析した。

石﨑　桂　G. F. ヘンデルの《エジプトのジューリオ・チェーザレ》HWV17（1724）におけるアリア作法
—人物の心理描写と音楽表現の視点から—

要旨：G. F. ヘンデルの生涯を辿り、18世紀のロンドンにおけるオペラ文化から彼の人物像を明らかにする。さらに《エジプトのジューリオ・チェーザレ》におけるアリアを楽器法やテクストの意味と音型の関係、調性格から分析し、オペラにおけるドラマや人物像の表現手法の一端を明らかにした。

林　愛理沙　フランシス・プーランクの《戯れの婚約》と《メタモルフォーズ》における詩と音楽
—詩の主体と音楽関連を中心に—

要旨：本論文はプーランクの歌曲集《戯れの婚約》と《メタモルフォーズ》を題材に、テクストの解釈と楽曲分析を通じて、プーランクが詩の主体の心情をどのような作曲法により表現したのか明らかにするものである。

〈卒業論文〉

音楽学専攻

空　紗央里　二十世紀前半のアメリカ実験音楽におけるピアノの変容
The Transformation of the Piano in American Experimental Music in the First Half of the 20th Century

要旨：二十世紀におけるアメリカの現代音楽・実験音楽の展開は、往々にして雑音の使用など音に対するアプローチの変容として語られるが、そのような音の産出に必要である楽器に対するアプローチの変容はあまり省みられることなく、置き去り

にされてきた。しかし、ここ 20 年くらいの音楽学の中で楽器を中心に据える研究が盛んになってきている。そこで、本研究では音ではなく、音を作り出すための楽器へのアプローチの変容に注目することで、二十世紀前半におけるアメリカの実験音楽の展開を辿り直す。対象とする楽器はピアノである。まず十八世紀から十九世紀にかけてのピアノの発達を概括した上で、演奏方法の拡張と楽器自体の拡張という二つの基本軸を立てて、ピアノという楽器へのアプローチの多様化をたどる。具体的には、ヘンリー・カウエルのクラスター奏法とケージのプリペアド・ピアノを取り上げ、これらのピアノに対する新しいアプローチが単なる楽器の改良や演奏法の革新だけに留まらず、音楽の作り方や楽譜と音楽の関係などそれまで自明とされてきた音楽のあり方を問い直すきっかけになっていることを検証する。